

# 中国留学記

## 1

北海道教育大生

山本 可奈江

## 中国の大学生 彼らが私にもたらしたもの



大学構内を歩く中国人学生

私は2006年2月から2007年1月までを中国遼寧省瀋陽市にある瀋陽師範大学で過ごした。8年前、中学生だった私が初めて踏んだ外国の地、それが中国だった。それをきっかけに世界の中でもアジアに興味を持ち、大学生となった私は教育大学の交換留学制度を利用して中国への留学を決意したのである。同じアジア人、容姿はもちろんのこと、生活文化や精神文化も似ているのだろうと思っていた。そして「中国」に対して漠然としたイメージをもって乗り込んだ。そこでの様々な人との出会いは、私を異文化理解に近づけてくれた。

### 中国の匂い

出発前、「帰ってくるときにはきっと中国の匂いがするね」と友達に言われた。匂いを気にしながら飛行機に乗り込み、深呼吸。まだよくわからないが、なんとなく違うのかもしれないと思っていた。およそ三時間半のフライトを終え、緊張しながら飛行機を降りる。右も左もわからないとはこのことかと、人の後を必死に追っていた自分を思い出す。匂いのことはすっかり忘れていた。匂い待っていてくれたのは師範大学の趙先生。日本語を少し話せる先生はそれから一年間ずっと私を気にかけてくださったとても優しい方だ。二

イハオがただけ挨拶をし、車に向かう。それにしても空港は人でごった返していた。さすが13億の人口を抱える中国だと感じたが、あとあと気付いたことは、中国人が友人や家族の送迎をととても大切にしていることだ。どちらもとてもめでたい出来事なのだろう。その日もおそらく長期間日本に留学していただろう青年が私と同じ便に乗って中国へ帰ってきた。親族や友達十数人に囲まれ、花束を受け取っていた。日本にしばらくいたせいなのか、彼は恥ずかしげな様子だった。空港を出ると広い大地が広がっていた。日本とは違う風景に興味津津



大学内の図書館、自習する学生で混雑する

の私は終始外を見る。当たり前だが漢字のみの看板、日本のような一軒家は少なく、大きなアパート群がこれでもかというくらい整然と並んでいて、街に入ると2月のまだ寒い中、露店を並べる人たちが賑わう。中国へ来たのだと実感していた。

そういえば中国の匂いを感じた瞬間がある。それは毎度街へ出かける時のことだ。路上では焼き芋や串焼き、臭豆腐と呼ばれる豆腐を揚げたもの（字のごとく臭い。私には食べられなかった）、タンタン麺など

の麺類、鳥のから揚げ、煎餅（日本の煎餅とは違い、クレープのような生地で野菜や肉を巻いたもの）等、様々なものを売っている。まるで日本のお祭りを思わせる賑わいだ。しかし、どんな食べ物も日本とは違う匂いがした。それはおそらく使う香料や油、そもそもの材料の違いからなのだろう。食欲をそえられる匂いから、近づきたくないような匂いまで様々だった。さらに中国人々はどこでもかまわずそれを食べる。屋外はもちろんのこと、百貨店の中

でもタブーではないのだ。だから街ではどこにいても何か匂っていた。

結局日本の友達がイメージした中国の匂いが何なのかはわからないが、この一年間、様々な場面で人や文化の匂いを感じた私である。

### まるで街のような大学で

師範大学はとにかく広いと聞いていたが本当だった。札幌の教育大学は五分校制のため小さなメイン校舎が一つ。中国ではほとんどの大学が全寮制。そのため大学内には校舎や学生寮のみならず、すべてが揃っている。日用雑貨から食料を売るスーパー、クリーニング店、銭湯、床屋さんなど。また食堂もかなり充実している。学生たちはここで何不自由なく生活できるというわけだ。

師範大学は街から離れているせいもあって、中国人学生たちは平日外出することはほとんどない。日本の大学生の生活とは全く違っていった。毎日授業が終わるとすぐに図書館へ駆け込み、寮の門限ぎりぎりまで勉強する。初めのうちはそんな生活が信じられなかった。日本の大学生は放課後こそ大学生生活だと思っているところが少なからずある。その時間を使って部活やサークル活動、アル

バイト、友達や家族との時間を楽しんでいる。そうやって生活してきた私は、中国人の多くの学生たちに生活の中で何か楽しみはあるのかとじっくり観察していた。そんな彼らとの交流の中でやはり頭が下がるのは、学習への意欲とそれに対する責任感である。例えば日本語学科の学生たちはこぞって私の寮を訪れ、一緒に勉強して欲しいと言ってくる。160人以上いる留学生の中で日本人はたった6人、そのうちの誰かと自主学习という形で時間を決めて勉強したいということだった。こちら側は受け入れるにも限界があり、断らなければならぬこともあった。それにしてもよく学ぶ。図書館の廊下では英語や日本語、ロシア語など、外国語を学ぶ学生たちがそれぞれ音読の練習をしている。私もその勉強法を真似してみた。その成果が現在の私である。自発的にせよ、そうでないにせよ、彼らの「勉強熱心」は私になんらかの利益をもたらすものだ。

学生たちは朝6時には起きている。運動をする者、朝ごはんを食べる者、勉強する者と様々だが、とにかく中国人の朝は早いといつていいようだ。というのも朝の点呼に間に



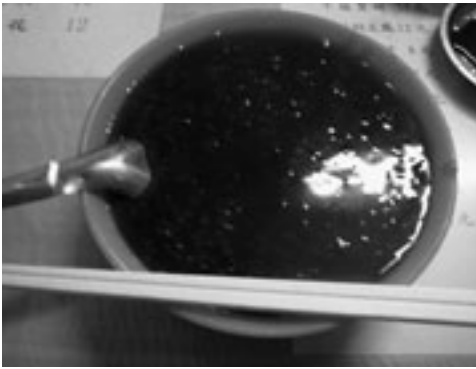
食事を楽しむ中国人学生たち

合うためには仕方ないのだ。前の晩に銭湯から汲み置きしていたお湯で顔を洗ったら朝ごはんを食べに行く。周知のとおり中国の朝ごはんはお粥だ。たいていの食堂にはふつうの白いお粥と八宝粥という八種の豆を使ったお粥が用意されている。どちらも一杯5角（8円くらい）と格安。特徴は日本のお粥より水分が多いこと。お腹はいっぱいになるがすぐに空くのも事実。お粥と一緒に食べるのは「包子」という小さな肉まん、10個ほど入っている。

お粥と一緒に食べる「包子」という肉まん



八宝粥



### 強い学習意欲

授業は8時からだ。それに間に合うように学生たちの大移動が始まる。各寮から学科棟へ向かうその様子はまるで大学内とは思えない。学生たちは蟻のように連なっていく。一コマ45分の授業を昼まで続けたら昼食の時間になる。この時間は食堂がもつとも込むため、留学生も必死に席を確保しようと早足で食堂へ向かう。しかし中華料理のいいところは回転が速いことでもある。注文した料理はあっという間に運ばれ、皆も勢いよく食べ始める。人気の店では外で待っている人もいるが、どの店でもテイクアウトができるので利用する学生も多い。驚くのは麺やスープ類を持ち帰る方法だ。なんとビニール袋に直接入れる！最初は何となく不衛生に見えるが、慣れてしまえば心配もあつたが、慣れてしまえば案外楽で、ビニール一枚で十分役割を果たしていた。日本のように包装にこだわるのが果たして良いのか悪いのか……。

昼食を終えると学生たちはまた授業へ向かう。実は師範大学の留学生は午前中で授業が終わり、午後はまったくのフリータイム。自習する者から、遊びに出かける者、とにかく

思いのままに時間を使う。中国人学生たちは夕方までの授業を終えるとすぐに図書館へ向かい自習を始める。図書館は五階建てで、各階に何部屋も大きな自習室があつた。それでも学生たちは席を確保するために友達に頼んだり、物を置いておいたりしていた。日本では、授業ではあ

つても、図書館で席取りをしたことは無いように思う。それは環境的にも図書館でしか勉強できないことが関係している。というのも、ほとんどの学生の寮室は6人部屋、それもある留学生が住む2人部屋よりも狭く、二段ベッドが三つと長机が一つのみ。各部屋に水道は無く、もちろんテレビも無い。その空間で4年間共に生活する友達や家族のような存在だそう。日本人からすれば、プライベートが無いとか、不便だとかで、なかなか受け入れがたい現状だろう。しかし、彼女たち（私が入ることができなのは女子寮）はそれを楽しんでいるように見えた。一人っ子である自分たちが初めて親元を離れて生活するとき、たった一人や二人ではあまりにも心細いという言い分だった。

同室の6人は交代で銭湯のお湯を汲みに行く。それを運び終えたらや



大学構内。奥に見えるのは学生寮



食堂が並ぶ構内

つと一日が終わる。10時半には寮の門が閉まる。

毎日同じ生活をしている彼・彼女たちだが、退屈そうには見えなかった。きつと毎日の努力はそれなりの成果をもたらし、充実感へとつながっているのだろう。また、クラスや寮の友達と一緒にいることで寂しさを紛らわしている生活は、長期休みをさらに特別なものとする。

中国には大きく分けて5つの休みがある。5月の労働節(いわゆるゴールデンウィーク)、夏休み、10月の中秋節、冬休み、そして2月の旧正月だ。学生たちは休みに入ると一齐に実家へ帰っていく。たいていの学生が第一日目、もしくは前日の夜に旅立つ。さすが広い中国、車で10時間以上かかるところから来ている学生もいるのだ。大きな荷物を持って帰っていく彼らを見ていて微笑ましかった。日本では親離れが早いというか、親や家族に対する感情を素直に言葉や行動で示すことは少ない。たとえ長期の休みに入っても、アルバイトや友達とのイベントを優先して、実家に帰るのはお盆くらいなものだ。親は寂しく思っているかもしれないが、そんなことはお構い無しに大学生が多いのではないだろ

うか。中国では親と子どもが互いに恋しがっている。それが目に見えてわかるのは心温まるころだ。私が遠く海の向こうの家族や友人に思いを寄せ、日々感謝するようになったのは中国人の友達の影響が大きいかもしれない。

長期休みを終え大学へ帰ってきた彼らはまるで親離れしたての大学一年生だ。しかしそのうちまた大学生活に慣れ、今までと同じリズムを取り戻す。そもそも努力のエネルギー源が親孝行なのかもしれない。すべての人が大学へ進学できるわけではない、しかし大学を出ていた方がより高収入の仕事を探しやすいのが事実だ。一人っ子政策もあって、両親の期待に応えようと責任感にあふれている。日本では必ずしも勉強だけが大切だとされているわけではなく、そしてその価値観から見たら、中国人の学生たちが単調な生活を送っていると感じるかもしれない。しかし私たちはむしろ、目標を持ち毎日それに向かって努力する姿は見習うべきだと感じた。私もその気持ちを持ってこれからの大学生活を充実したものにしていきたい。

ファーストステップ

当行ATM  
時間外  
手数料無料

道銀取引優遇サービス[ステップドゥ]。  
お取引に応じて、オトク度が3段階に  
ステップアップする、  
道銀ならではのサービスです。

各サービスの適用にはお取引条件がございます。

道銀取引優遇サービス[ステップドゥ]

ステップ  
Do



どさんこバンク  
北海道銀行

お申し込みはカンタン! 詳しくは窓口または当行ホームページにてご確認ください。  
<http://www.hokkaidobank.co.jp>